「賀茂いつきのみや顕彰会」設立記念シンポジウム

平安から鎌倉時代初期に京都の賀茂社に奉仕した皇女「斎王（斎院）」の功績をたたえ、その文化を後世に伝えようと、京都市左京区の賀茂御祖（かもみおや）神社（下鴨神社）で「賀茂いつきのみや顕彰会」が設立された。名誉会長には茶道裏千家淡交会理事長の千容子さん、会長には俳優の竹下景子さんが就任。設立総会後には記念シンポジウム「才女の文化をつなぐ」が開かれ、なごやかな雰囲気の中、参加者は古（いにしえ）の斎王サロンに花開いた文化や伝統に思いをはせた。

ウム登壇者
竹下　景子
冷泉　貴実子
山本　淳
司会　産経新聞論説委員　山上直子氏

古の斎王文化に思いはせ

国を思う志が文化に影響与えた

――竹下景子氏

竹下景子氏

俳優。愛知県出身。テレビ、映画、舞台など出演多数。

冷泉貴実子氏

冷泉家時雨亭文庫常務理事。京都府出身。冷泉家25代為人夫人。

――本日は賀茂斎王（院）をテーマに「才女の文化をつなぐ」と題しています。さて、どんな女性たちだったのでしょうか。まずは実在の斎院、そして物語に登場する斎院と、さまざまな「斎院」を知るところから始めたいと思います。ご一緒いただくのはこのお三方です。竹下さんはこれまでに「源氏物語」の女君たちを演じられたことがあるそうですね？

竹下　はい。随分前ですがドラマで葵上（光源氏の最初の妻）を、その後映画では六条御息所（光源氏の恋人）を演じました。

――その物語の女性たちも斎院と関わりがあるようですが、それはまた後ほど。冷泉さんは藤原俊成・定家以来約800年の「和歌の家」に生まれ育った方です。その立場からお話を伺いたいと思います。

冷泉　はい。よろしくお願いいたします。

――ではまずは山本先生、お願いします

山本　最初に初代の有智子内親王のお話を少し。この方は810年に斎院さまとなり、数えでわずか4歳という幼さでした。漢詩の名手で勅撰漢詩集「経国集」にも取られていますが、これは文章が国を豊かに穏やかにするという考えのもとに作られたものです。内親王もそうした使命感をもって多くの漢詩を作られました。

――なるほど。国のために詩を詠むのも務めだった

山本　少し時代が下って、清少納言や紫式部の時代は「大斎院」と呼ばれた16代選子内親王。975年から57年間、68歳まで務められた方です。とても尊敬され、その周りに女房らが集まるサロンも当時の人々の憧れの存在でした。

――清少納言の「枕草子」にもエピソードがあるそうですね？

山本　清少納言が仕えていた中宮定子というお后のもとに、斎院さまから正月のプレゼントと和歌が届く場面があります。ところが早朝で、まだ雨戸も開いていなかった。清少納言は急いで台に上ってガタガタと重い雨戸を開け、かしこまって受け取ったと書いています。それだけ気を使う相手、敬われていた存在だったということですね。

――和歌を贈る、贈られるといういかにも平安王朝らしいシーンですが、冷泉さん、こうしたやりとりはよくあったのでしょうか

冷泉　そうですね。斎院さまからは少し外れますが、昔の上流貴族の女性というのは御簾の中にいて顔を見せないものでした。でも恋愛はしますよね。どうするのかというと、噂話なんです。仕える女房たちが「うちのお姫さんはどんなにきれいで賢いか」と噂する。この「賢い」というのが重要で、世界にも楊貴妃など有名な美人はいますが、日本では美しいことはもちろん、賢いことも重要でした。そしてその中に歌が上手だということも含まれていたのです。

――まさに才女ですね

冷泉　そんな噂話で男性は恋をするわけですが、今ならスマートフォンでメールを送るようにまずは手紙を贈る。でも直接は渡しません。文使いが引き受けて持っていくのですが、女房が一緒に採点するんです。歌はうまいか、文字はどうか、料紙やお香のセンスはいいか…と総合判定する。返事も女房が書く。そんなやりとりの後、ようやく会ってみようかとなるわけですが、そこでも実は選択権は女性にありました。和歌は恋愛の手段でしたし、また神にささげるもの、神への願い事を書くものでもあったのです。

和歌は恋愛の手段と神への供物

――冷泉貴実子氏

初代は4歳で就任　漢詩の名手に

――山本淳子氏

――奥が深いですね。ここまで伺って、竹下さんはどんな印象ですか

竹下　たいへん興味深いです。特に現代と比べると分かりやすいですね。斎王さまがそんなに幼くしてなられたことも驚きでした。でも、成長されて思春期には恋する気持ちが芽生えたりしなかったんでしょうか。

山本　恋愛はしてはいけないことになっておりました。女性として憧れはあったかもしれません。ただ、周囲の女房たちの恋愛は自由です。例えば選子に仕えた中将の君という女房がいましたが、その彼氏は紫式部の弟でした。2人の手紙を式部が盗み見したことが紫式部日記に書かれていて、選子の話題も出てきます。

――その部分を少し

山本　実は紫式部はちょっといけずなところがありましてね…。

竹下　いけず…？

山本　例えば、中将の君は自分の勤め先（斎院御所）の自慢たらたらでいやになっちゃう、なんて書いている。選子さまは本当にすばらしい方だと思うけれど、そりゃああんなに環境のいいところにいたら風流にもなるわよね、と。

――選子は持ち上げつつも、愚痴を言っている

竹下　なんだか、今とあまり変わりませんね。

□

――それではここまでは実在の斎院について伺いましたが、次は物語に登場する斎院をみてみましょう。来年の大河ドラマの主人公は紫式部で話題ですが、その大作「源氏物語」にも斎院が登場します。そのうちの一人は、ご本人のあずかり知らぬところである事件のきっかけになった方でした

山本　葵祭の車争いですね。このときの斎院さまは源氏の君の父・桐壺帝の娘、第3内親王です。祭りの前、禊に向かう行列に源氏も参加することになり、それを見物に出かけた六条御息所と葵上の牛車が場所争いをして、家来の乱闘事件になってしまいます。

――竹下さんはその正妻と恋人、両方を演じられた。ちょっと珍しいかもしれません

竹下　この事件は映画で六条御息所として経験しました。後ろから牛車がドンとぶつかって。数珠を握りしめ、くやし涙を流しました。私は源氏の君の姿を見ることもできず、ただただ傷ついて家に戻ったのでした。一方、葵上を演じたときは親が決めた結婚で夫には最愛の女性がいましたから、かわいそうな女性だったかなと思います。その上、六条御息所に呪い殺されてしまいまして…。

山本淳子氏

京都先端科学大教授。石川県出身、京都大院卒。平安朝文学研究者。

――呪ったり呪われたり、役とはいえ、たいへんでしたね…。斎王の話に戻りますが、その禊の日も現代の葵祭では斎王代の「御禊の儀」が行われています。今もその姿を目にすることができるわけですが、冷泉さんいかがですか？

冷泉　すばらしいことやと思います。不思議なことに、昔からお姫さまというと白雪姫やシンデレラのイメージ。欧州風なんです。なぜ日本のお姫さまではないのでしょうか。ですから斎王代さんを見ると、ああ日本のお姫さんだと身近に感じることができる。今の女の子たちも見て憧れてほしいなあと思います。

□

――さて次は、才能豊かな実在の斎王のお話です。31代式子内親王は有名な歌人でもありました。和歌といえば冷泉さん。ご紹介いただけますか？

冷泉　斎王時代に詠まれた歌があります。

《忘れめや　葵を草に　ひき結び　かりねの野辺の露のあけぼの》

これはお祭りの前に潔斎されたときの歌で「忘れようか、いや忘れられない。葵の葉を引き結んで枕にし仮寝をする、野辺の露の美しい清らかな風景を」といった意味ですね。斎院の館で詠んだそうです。

――美しい歌ですね。歌人としても才能あふれる方だった。そんな35代にわたる斎院の文化や生涯、伝統を学び、後世につないでいくのがこの「賀茂いつきのみや顕彰会」の趣旨です。では最後に一言ずつ

山本　とても楽しかったです。大斎院選子は女房に物語の係を作って制作させていました。残念ながら今に伝わっていませんがサロンは文化の最先端だった。今も京都は文化の発信地だと、そんな気持ちを新たにした一日でした。

冷泉　私は日本という国は平安の昔から女性が活躍してきた国だと思っています。紫式部も清少納言も、高くはない身分の貴族女性が実力で国家公務員になった。キャリアを積んでのし上がったのです。そんな人たちが豊かな文化を作ってきた。これは世界に誇っていいことですし、誇りを持ってこれからも伝えていきたいと思います。

竹下　斎王さまは幼いころから国の一翼を担って勤めに励まれ、しかも志を持って研鑽を積んだ。その影響がまた多くの人に広がった文化サロンはすばらしいと思います。そんな斎王さまの功績を広く私たちも学んでいきたいし、確かにそういう方々がいたことが今日は実感として伝わりました。これから将来に向けて私たちができることを考えていきたいと思います。

――ありがとうございました

歴代賀茂斎院

代	御名	在任
1	有智子内親王	810−831
2	時子内親王	831−833
3	高子内親王	833−850
4	慧子内親王	850−857
5	述子内親王	857−858
6	儀子内親王	859−876
7	敦子内親王	877−880
8	穆子内親王	882−887
9	直子女王	889−892
10	君子内親王	893−902
11	恭子内親王	903−915
12	宣子内親王	915−920
13	韶子内親王	921−930
14	婉子内親王	931−967
15	尊子内親王	968−975
16	選子内親王（大斎院）	975−1031
17	馨子内親王	1031−1036
18	娟子内親王	1036−1045
19	禖子内親王	1046−1058
20	正子内親王	1058−1069
21	佳子内親王	1069−1072
22	篤子内親王	1073−1073
23	斉子女王	1074−1089
24	令子内親王	1089−1099
25	禛子内親王	1099−1107
26	官子内親王	1108−1123
27	悰子内親王	1123−1126
28	統子内親王	1127−1132
29	禧子内親王	1132−1133
30	怡子女王	1133−1159
31	式子内親王	1159−1169
32	僐子内親王	1169−1171
33	頌子内親王	1171−1171
34	範子内親王	1178−1181
35	礼子内親王	1204−1212

斎王　さいおう、いつきのみやとも。選ばれて伊勢神宮と賀茂社（下鴨神社と上賀茂神社の総称）に奉仕した未婚の皇女で伊勢の「斎宮」に対し賀茂社は「斎院」とも呼ばれた。斎院初代は平安時代の嵯峨天皇の皇女、有智子内親王。鎌倉初期の35代礼子内親王まで約４００年続いた。

賀茂斎院歴代斎王神霊社

歴代の御霊をまつる「賀茂斎院歴代斎王神霊社」。第三十四回式年遷宮事業の一環として平成30年に再興

嵯峨天皇のお嬢さんが初代の賀茂斎王となられて以来約４００年、35代のいつきのみやさまが葵祭などの勅祭にご奉仕されました。

初代の有智子内親王は漢詩の才に優れた方で、下鴨神社の糺の森を詠まれたと思う七言律詩が残っております。その最後の2行に「これより更に恩顧のあつきことを知る　生涯何を以ってか穹蒼（青空の意）に答へん」とあります。

一般にこれは父天皇の恩顧と解釈されるのですが、私はみやさまが賀茂のご祭神に感謝しお務めする中で多くを周囲の女性らから学ばれた。そのことに生涯をかけてお礼をしたいと考え励まれたのではなかったかと思うのです。それは後の斎院文芸サロンのさきがけとなるものでした。

そんなお考えのもと顕彰会の設立は、私の長年の夢でした。今後は皆さんとともにさらに活動を広げてまいりたいと思います。

賀茂御祖神社
新木直人宮司

賀茂いつきのみや顕彰会　発起人

名誉会長	千容子氏（茶道裏千家淡交会理事長）
会　　長	竹下景子氏（俳優）
副 会 長	冷泉貴実子氏（冷泉家時雨亭文庫常務理事）
〃	濱崎加奈子氏（京都府立大学准教授）
理　　事	檀ふみ氏（俳優）
〃	西尾陽子氏（本家八ツ橋西尾会長）
〃	西村明美氏（柊家女将）
〃	佐々木真弓氏（ステンドグラス作家）
顧　　問	新木直人　（賀茂御祖神社宮司）

〈企画・制作〉産経新聞社メディア営業局